

F/D活動との接点から図書館を視る

ラーニング・コモンズを例に

(財) 大学コンソーシアム京都

井上 真琴



●欧米のF/Dは図書館に期待する？

昨年来、着任した仕事の関係で、教育改善や学習支援の視軸から図書館を眺める機会が多い。というのも、教員の組織的な教育能力向上を図るF/D(ファカルティ・ディベロップメント)活動の推進業務に就いているためである。

こうした事情で、国内および諸外国のF/D活動と高等教育改革の実相を視察する機会が多い。教育との連携という文脈で、図書館は今後どうあるべきか、何ができるのか。私の関心事はここにある。

本年一月に京都大学で開催された国際会議「日本のF/Dの未来」でいみじくも、ノースカロライナ大学本部・副部長から「図書館をいかにF/D活動に巻き込むかが鍵だ」との重要発言があった。しかし、図書館と教育の連携が希薄だと嘆く日本の図書館関係者が、この種の会議に参加することは稀である。実に残念なことだ。例えば昨今、大学図書館界で喧伝されるラーニング・コモンズ。耳にしすぎて、食傷気味の方も多であろう。既にコモンズ設置を実現した大学図書館もあるが、コンセプトの絞り込み、教育機能との連携面では、まだまだ認識は甘い。高等教育の質の向上、教育方法の改善、学生の学びの支援といったより広い文脈から考

察することが大切なのだが……。

●イギリス・レスター大学の視察

去る二月、海外のF/D活動を調査する目的で、イギリスのレスター大学を訪れた。教育改善の努力と研究の充実ぶりで、大学評価ランキングの地位を急激に上昇させている大学だ。昨年はTimes Higher EducationのThe University of the Year 2008/9に輝き、本年はQAA(英国高等教育質保証機構)の推薦で、Outstanding support for Student部門のトップに選ばれた。

体系的かつ豊富なF/D研修プログラムの内容と開発方法を解説してくれたのは、工学部長であった。挨拶を交わした折り、私が図書館関係者と知って、「君、教育方法や学習支援の質向上を考えるうえで、とても重要な役割を果たすのが図書館なんだ。後で私が建設委員を務め、昨年一二月にオープンしたばかりの図書館を是非みてほしい」と開口一番に言われた。早速、昼休みに新図書館 David Wilson Library に向き、工学部長の直々の説明で案内をしてもらう。

図書館のエントランスに入ると、空間構成は左側に利用者が寛ぐためのカフェ、右側には大学の新书店が配され、正面の入館ゲートへと至る。

図書館内部は、ガラス張りのグループ

ワークルームが居並び、各部屋にはホワイトボードやディスプレイ装置がおかれ、学生たちが議論をする姿が目につく。PCコーナーも円形テーブルを採用するなど工夫を凝らした配置で盛況である。

利用に悩む学生は、Help Zone にいる図書館員、Help Team とプリントされたTシャツを着用したアシスタントに気軽に声をかけて支援を受けている。

上階の Student Development Zone には、Student Learning Centre があって、学習支援活動を展開している。デスクに図書館員が常駐し、学習アドバイス(予約制)、調査研究スキルのコンサルテーションを行い、各種セミナーの開催も盛んに実施する。セミナールームはすぐ傍にある。

そして、周辺には多彩な学習指導用のチップス資料が並ぶ。学習スキル系では、Effective Note Making、Improving your Reading Skills、ライティング系では、Planning Essays、Writing essays、What is critical writing、Avoiding Plagiarism、プレゼンテーション系では、Planning a Powerful Presentation、Using Visual Aids などに興味を覚えた。

同行の日本人の教員からは、「ここまで図書館が教育の手伝いをやってくれるのか」と感嘆の声があがる。日本の大学図書館も工夫を凝らして様々なサービスを試しているのに、あなた方に関心がない、いやサービスを教育に組み込む能力がないだけだ! と嘯いてしまう。とはいえ、教員に外国の現状を見てもらうことは、近い将来図書館の味方になってくれる人をつくる素晴らしい機会であろう。



Group Study Room (上) と Student Development Zone (下)

●空間を体験して感じる

新図書館の空間を体験した感想を述べよう。館内に足を踏み入れると、グループワークを行う学生の様子が見て取れる。グループ学習室はガラス張りである。

こう書くと日本でも、「学生が何をやっているか丸見えなので、管理がしやすい」という声が聞こえてきそう。実にズレた評価である。少なくとも私には、管理面より教育的効果に視線がいく。透明でオープンな空間の利点はなにか。それは、学び方が「見える化」され、お互いに触発されることにある。

あるグループはコンセプトマップを白板に書いて、解決に向けて議論を行っている。またあるグループは、ブレイン・ストーミング作業でひとつずつ問題を付箋紙に書きあげ、机の上に並べて分類作業をしている。また、あるグループは、何やらグラフかマトリクスをディスプレイに映し出して相談している……。

それを見て、「なるほど、あのように分析するのか」、「グラフを作ればプレゼンテーションが効果的だな」、「作業計画をマトリクスにするのか」と自然と目を凝らす。館内空間で展開される議論や作業が映し出

す風景は、作業手順や学習の仕方を盗むように促す。考え抜かれた利用者相互の教育的な「気づきの場」であり、創造につながる「空間の仕掛け」なっているとの印象を受けた。

●学びのアトリエ空間

その時、ふと思いついたのが「アトリエとしての授業」というエッセイである。

同志社大学の佐伯順子先生は言う。

「理路整然とした研究成果を知りたいのなら、本を読む方がはるかに効果的である。だが、授業に出席することの意義は、一見整然とした学問の裏にある試行錯誤の過程、研究者の仕事の舞台裏ともいべきものに直にふれ、そこから活字にきれいな行間のあわい、知的創造の「秘密」を読み取ることはないか」（京都新聞2004年3月17日夕刊）

整理された知識を伝授される授業より、教員が研究過程で体験した迷いや思考の道筋が披露される授業が望ましい。実際に図書館のラーニング・コモンズで授業



学習相談のため待機する図書館員

を行っている教員もいるが、先の指摘と符号している。

これは学生同士の学習活動でも同様だ。授業の課題をこなす作業も、他の学生やグループの活動がお互いに見えて参考にできるほうがよい。リサーチの方法や作業プロセスが「見える化」され、学生同士、あるいは教員と学生との双方向の反応が共有できれば創造活動に繋がっていく。まさに「学びのアトリエ空間」である。

●情報リテラシーを育む空間

この空間は、情報リテラシーを育む空間でもある。授業で紹介される参考ツールやデータベース。こうした「道具」は、すぐに使いこなせるものではない。実際の探索作業や問題解決の文脈に埋め込んで活用しないかぎり、生きた知識の学習はできないからである。レポートの執筆やゼミ発表の準備をするプロセスのなかで検索を行ってこそ、使いこなす実践知を得られるはずだ。同様に、リサーチの現場でしか教えられない、学べない知識がある。講義で教えられる学術知や専門知は、具体的な探究行為のなかで実践知に変換される。このプロセスを経験でき、図書館による人的支援（レファレンスや機器操作指導）も受けられる場というのはなんと贅沢な空間であろう。情報を消費するだけでなく、生産や創造に結びつける「学びの身体技法」を磨く場所。「学習環境としての図書館」が注目を浴びつつあるのはこうした理由による。

●学習理論を知る必要性

効果のある教育改善、学習支援を

するのに必要なものは何か。それは、教員・図書館員ともに、「人はどのように学ぶのか」ということ学ぶことである。

レスター大学のFD委員長は、私たちのインタヴューに対して繰り返し陳べていた。学生の学び方を理解して、はじめて教育方法を議論できる。つまり、学習理論を知れば、どのような課題の出し方をすれば教育効果があるのか、理解度を増す説明とは何か、どんな支援がよいアウトカムを呼ぶのかかわかるという。

早速、イギリスから帰国して学習理論や学びの科学を扱う書物を繙いた。すると、私が学びのアトリエと感じたものは、「認知的徒弟制」という学習方法で説明できることがわかる。

事実を学習する学校教育と違って、職人の親方と弟子たちが教え学び合うプロセス、技を盗むプロセスをモデルにした学習理論である。知識という道具を、実際の問題解決の場で使う親方や先輩の「考え方」（認知）を学ぶ点に焦点を当てた理論で、実感を伴って理解できる。

また、プロの能力は「行為の中の省察」で磨かれると主張する「省察的実践」理論も刺激的であった。情報リテラシー教育のプログラム開発に、「調べながら考え、考えながら調べる行為」とする視点を持ち込む重要性を教えてください。

単に物理空間とお仕着せのサポートサービスがあれば、ラーニング・コモンズが成り立つわけではない。教育支援や学習支援を図書館が担いたいなら、無自覚な運営に陥りたくないなら、また教員と対等に議論したいのなら、学習理論に

親しんでおくことをお勧めしたい。

●教育改善の波に乗れ

中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて（答申）」では、「学生の主体的・能動的な学びを引き出す教授法を重視し、例えば、学生参加型授業、協調・協同学習、課題解決・探求学習などを取り入れる」ことが提言されている。教育が「知識の伝達」から「知識の創出・自主的学習」へと向かうのは明らかだ。

具体的には、PBL (Project/Problem Based Learning) や TBL (Team Based Learning) などの教育手法の実践を指すが、これは、授業の設計・運営・評価の面で教員に相当な力量と負担を強いる。FD研修プログラムには、この種の授業を担当するための職能開発コースも準備されているほどだ。

さらにいま、高等教育の「単位の実質化」が叫ばれている。学生たちの教室外の自主的学習を誘発し、学習時間を担保する指導、学生への課題の出し方や学生に「勉強させる」方法論もFDの課題テーマとなってきた。

こうした教育活動は、図書館の支援なしには実効性を持たない。昨年度のFD義務化、教育の質向上の潮流に歩調をあわせ、積極的に図書館が教育改善に向けてできること、学習支援で可能なことを主張すべき時を迎えている。いまほどその好機はない。ラーニング・コモンズひとつをとっても図書館と教育改善の接点となる。図書館の踏ん張りに期待したい。

（副事務局長・同志社大学所属）